

# 待兼山俳句会

第六百八十七回 世話人

山田安廣・鈴木輝子・寺岡翠・根来眞知子  
東中乱・向井邦夫・森茉衣

令和六年五月二十日（月）

会場 大阪俱楽部 会議室

締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡翠・東中乱  
東野太美子・向井邦夫・森茉衣・山田安廣

投句者

植田真理・碓井遊子・草壁昂・西條かな子・鶴岡言成・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄  
根来眞知子・平井瑛三

出席者十二名+投句者十名 計二十二名

兼題

初夏・姫女苑（姫女苑も可）（幹三） 草笛・若楓（暁子） 当季雜詠 通じて八句

次回

例会 令和六年六月十七日（第三月曜日） 会場 大阪俱楽部 会議室 締切 午後二時

兼題 藻の花・蝙蝠（幹三） 杜若・青嵐（暁子） その他当季雜詠

次々回

吟行 令和六年六月三十日（日）吟行地 京都府立植物園界隈（配布済み別紙参照）

選者吟

草笛の音が夕方つれてくる

泣く妹背負ひし姉や姫女苑

初夏の鷗に声をかけらるる

幹三

鳴りきうで鳴らぬ草笛日の暮れて

暁子

草笛の一吹き鳴りてそれつきり

葉を重ね風を重ねて若楓



「千曲川旅情の歌」が背景にあるのですが、そんなことを抜きにして「草笛を一と節」という措辞と藤村の「歌の彫られた石」がよく呼応しています。

・鳴りだせば思ひのままに草の笛

輝子

その通りです。一旦何かと何かがうまくかみ合つて音がするとボリュームや音の高低思いのまま。夏の道を高らかになる草笛が通つて行く景が見えます。

・風のなき音なき昼や姫女苑

和江

静寂の中の姫女苑に心が惹かれました。揺れる姫女苑はよく詠まれますが、なるほど、夏とはこういうものだなあと深く感心いたしました。俳句の目的の一つに、まだ言葉を使えなかつた幼い頃の感覚に戻るということがあると思っています。そのことを感じた一句。

・湖西線代田の中に着きにけり

遊子

夏をスケッチした水彩画を見るようです。省略がよく効いてるので余白がたっぷりです。初夏の句はこうなくつちや、と思いましたね。

・草笛を吹いている子が真ん中に

昴

子どもの句は他人事になるので警戒しているのですが、この句は子どもを観察する作者の気持ちがよく表れます。まるでカメラのシャッターを押すように、初夏の景が見事に切り取られました。

・砂ぼこり絶えぬ道の辺姫女苑

輝子

さらつとした空気の中の姫女苑。場所を描写するだけ全てが見えました。この花を表すのに、たくましいとか強いとかさりげないとかの措辞は不要、そう言つてしまえばお終いです。

暁子 選

山は濃く田は薄みどり夏きざす

乱

◎草笛の音が夕方つれてくる

若楓母校の駅名また一つ  
ほら貝に和する草笛山の寺

さゆらぎもなく盆栽の藤垂るる

幹三

◎泣く妹背負ひし姉や姫女苑

幹三

翠 翠

太美子

初夏の都大路を女車夫

瑛三

鳴りだせば思ひのままに草の笛  
若楓ぽつりと雨の降りだしぬ

初夏の窓今朝より赤子泣く声が  
風のなき音なき昼や姫女苑

木洩れ日の長谷の登廊若楓

初夏の風我にささやく歩こうよ

湖西線代田の中に着きにけり

草笛の高き音すつと青空へ

草笛を吹きて真昼を揺らし行く

草笛や長き耳朶持つ飛鳥仏

◎草笛や褒められし日の帰り径

◎十字架彫りし太腿乗り来ストロ初夏

池わたる風吹く先に若楓

草笛を吹いている子が真ん中に

初夏の鷗に声をかけらるる

草原のどこかで草笛吹いている

座敷まで緑に染めて若楓  
若楓須臾に過ぎゆく時を搖れ

輝子 幹三 和江 和江 安廣 朱美 遊子 邦夫 幹三 兵十郎 兵十郎 翠 幹三 鳴 幹三 鳴 幹三 安廣 真知子

・草笛の音が夕方つれてくる

幹三

草笛という季題は、夕暮、淋しさ、別れ、少年などのイメージを喚起する。季題の持つ力であろう。それに従えば一応無難な句ができる。問題はどうすればそこから一步抜け出しができるかであろう。この句は人を出さず草笛の音だけで勝負されている。

・泣く妹背負ひし姉や姫女苑

幹三

姫女苑は道端に咲く目立たない侘しい花で、いささか哀れを誘うが、何本か群れて咲く。この花に対し、泣く妹と背負う姉を斡旋されて成功した「取り合わせ」の句である。この作り方には、相対するものをもつてくる場合と、この句のように同じ雰囲気のものをもつてくる場合とがある。

・若き日のやうには鳴らぬ草の笛

安廣

草笛は茎を吹く場合もあるが、主に柔らかい葉を二つ折りにして、そこに息を吹き入れて音を出す。肺活量も違つてきているし、やはり草笛は少年のものだろうか。

暁子 特選句講評

テクニックで補えるものなのか。草笛に託し、その他諸々の老化を暗示する。

・草笛や褒められし日の帰り径

兵十郎

誰が、どこで、誰に、なぜ褒められたのであろうか。いくつものWに、読者の想像は広がる。寂しい草笛が多い中で、これは晴れ晴れとしたもの。私は学校で先生に褒められた少年の下校道を想像した。

・十字架彫りし太腿乗り来メトロ初夏

翠

「太腿乗り来」にドキッとして、思わず選んだ。大阪メトロの難波、心斎橋あたりの外国人観光客のことかと思ったが、日本人だつたとのこと。少々盛り込み過ぎだが、上手く処理された。

※耕運機数多の鳥や後を追ふ　という句があつたが、後を追ふ数多の鳥や耕運機　とされるといい句になると思います。

互選三句

朱美選

山は濃く田は薄みどり夏きざす

乱

園児らの草笛しばし行進曲

盛雄

草笛や誉められし日の帰り径  
嬉しい気持ちに草笛がよく似合つて活き活きと心に響く。

瑛三選

草笛の異国の丘や遠き日の

かな子

草笛や長き耳朶持つ飛鳥仏

兵十郎

若楓赤ちゃん帽の落し物

かな子

無さそうでよく有る風景。お母さん要注意。

邦夫選

抜け露地の白き華やぎ姫じよおん

眞知子

寂しさに口笛吹けば子ら寄り来

暁子

鳥も虫も訪ふ初夏の我が菜園

翠

育つ野菜、飛び交う鳥や虫、初夏の畑に賑わいが増す。

恵子選

鳴りさうで鳴らぬ草笛日の暮れて

暁子

若き日のわれら思ほゆ若楓

暁子

なんという事もなき日や姫女苑

輝子

日ごろの継続、ふだんの大切さを感じました。

言成 選

草笛の音が夕方つれてくる  
雨あがり日差はすでに夏のもの  
座敷まで緑に染めて若楓  
庭先の楓越しの日差しに緑に染まる座敷がみえるよう。

幹三 輝子 安廣

堯子 選

葉を重ね風を重ねて若楓  
初夏の風我にささやく歩こうよ  
なんといふ事もなき日や姫女苑  
平凡な日常の有難さとありふれた花の取り合わせが絶妙。

暁子 朱美 輝子

太美子 選

木洩れ日の長谷の登廊若楓  
草笛の高き音すつと青空へ  
草笛や長き耳朶持つ飛鳥仏  
草笛と飛鳥仏の取り合せの妙。時がゆっくりと流れる。

和江 邦夫 兵十郎

輝子 選

若楓赤ちゃん帽の落し物  
初夏の窓今朝より赤子泣く声が  
草笛や誉められし日の帰り径  
誉められて意氣揚々と帰る径。草笛もよくひびく。

かな子 和江 兵十郎

兵十郎 選

座敷まで緑に染めて若楓  
園児らの草笛しばし行進曲  
初夏の窓今朝より赤子泣く声が  
夏に入り窓を開けたのである。赤子の声が聞え始めた。

安廣 盛雄 和江

茉衣 選

砂ぼこり絶えぬ道の辺姫女苑  
草笛の異国の丘や遠き日の  
鳥も虫も訪ふ初夏の我が菜園  
菜園に色々な小鳥や虫がやつてくる風景はグリム童話的。

輝子 かな子 翠

眞知子 選

繁りても風の抜け来る若楓  
若楓ぼつりと雨の降り出しぬ  
雨やみてのこる雫や若楓  
若楓が若楓らしいのはほんのひと時。そんな三句です。

安廣 幹三 幹三

真理 選

草笛や誉められし日の帰り径  
鳶の輪の広がりゆきて夏きざす  
初夏の都大路を女車夫  
女車夫の淫刺としたさまが快い。

兵十郎 幹三 瑛三

翠選

町医者の二代目凜々し若楓

恵子

抜け露地の白き華やぎ姫じょおん

眞知子

街づくり賑わひ戻り姫女苑

恵子

地震被害を受けた能登半島の街の復興を見守る姫女苑。

盛雄選

若楓緑の雨をはじくかな

乱

並び立つ塔を包むや初夏の山

兵十郎

はつなつの朝の打ち水風光る

昂

「打ち水」と「風」と「光る」が初夏を表わして爽か。

安廣選

鳶の輪の広がりゆきて夏きざす

幹三

草笛の異国の丘や遠き日の

かな子

おしゃべりな少女らの午後姫じょおん

眞知子

少女がお喋りをしているように姫女苑が一杯ゆれている。

遊子選

藤村の歌碑に一と節草笛す

瑛三

S Lの阿蘇ゆく初夏のみどりかな

盛雄

黒光る車夫の手足や初夏の京

兵十郎

働く人の句という特集記事を読みこの様な句かと共感。

乱選

乱さるる髪快き初夏の風

真理

草笛のうまき子なりし転校す

輝子

健気なる引き込み選の姫女苑

邦夫

引き込み線に似合う姫女苑にも「健気」と同情する。

参加者自選句

初夏の風我にささやく歩こうよ

朱美

学び舎を緑に染めて若楓

瑛三

木洩れ日の長谷の登廊若楓

和江

手にとまるひ弱なる蚊よ独り居の

かな子

草笛の高き音すつと青空へ

邦夫

町医者の二代目凜々し若楓

恵子

姫女苑咲く畦道を散歩する

言成

口一杯朝日頬ばる若楓

昂

若楓木漏れ日きらつと空や青

堯子

やさしき名持ちてしたたか姫女苑

太美子

コミニユニティーバス待つ角や姫女苑

輝子

草笛や誉められし日の帰り径

兵十郎

親思ふ松陰の墓若楓

茉衣

おしゃべりな少女らの午後姫じょおん

眞知子

乱さるる髪快き初夏の風

その名冠す橋より仰ぐ花櫻

S Lの阿蘇ゆく初夏のみどりかな

座敷まで緑に染めて若楓

熟鮨の香にも慣れたる湖北かな

姫女苑初めて見詰む姫として

翠 真理

石竹をブローチとして亡き母に 幹三  
石竹や小さく震えて一巡す 翠

石竹の我に物言ふ花の色 安廣

石竹の可憐纖細名に添はず 亂

安廣 亂

### 即吟 「石竹」を詠む

今回は選者の席の前に小さな石竹のピンクの一輪が飾られました。時間が足りず発表はできませんでしたので、初公開です。

ひとこと

山田安廣

例会ご案内でもお知らせしました通り四月二六日田中嵐耕さまが逝去されました。改めてお知らせ申し上げますと共に衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

つきましては弔句集を制作してご遺族にお届けしたいと思ひます。関西草樹会と重複して参加されている方も多いので関西草樹会のご厚意によりまして、合同で弔句集を編集させて頂く事と致しました。多くの方より弔句を頂きました。有難うございました。

石竹やつくづく姉妹欲しかりし 暁子 翠  
両選者小さき石竹じつと見る 邦夫 盛  
石竹や赤き紫白に映へ 恵子 遊子 亂  
何故に固き名のつく石竹や 堯子 亂  
石竹や供華美しく整へる 太美子 亂  
石竹に似る花多しどれも好き 輝子 亂  
石竹の葉の粉しろや硬き葉よ 兵十郎 亂  
小さくとも人目外さぬ石竹や 茉衣 亂

例会後幹三さんから「分かつてもらおうとすると、つい言い過ぎてしまう。勇気をもつて省こう」というお話がありました。